

## 「哀しみの果てで生まれた新しい歌」

哀歌

第3章 16節～33節

説教 本庄 侑子 伝道師

哀歌はバビロン捕囚という歴史的な事件を背景に持っています。哀歌の詩人は、祖国がバビロニアによって完全に滅ぼされ、同胞たちが死に呑み込まれていく姿を見たのです。その後も、苦しみに苦しみ抜いた数十年がありました。そして、そこで経験した恐怖、怒り、苦しみを赤裸々に綴りました。

大阪教会には敗戦後生き延びた方々がおられます。詩人が経験した背筋も凍るような出来事を目にし、その中を生きてこられたことでしょうか。しかし今や、戦争を知らない孫たち、ひ孫たちの世代になりました。哀歌の世界や、戦後の生き地獄を経験した世代とは相容れないように思えます。しかし、現代に生きる私たちもまた、バビロン捕囚のおそましき、戦後の日本の姿、死が人々を呑み込んでいくこの世の地獄を見ているのではないかと思います。

ある人はこの世の地獄を『人間の苦悩のすべて』と言います。『矛盾、絶望、迷い、暗闇、疑い、自分および他人に対する許しがたい裏切り、醜さ、汚れ、弱さ、競争、攻撃、抹殺。』哀歌の詩人は、私たちそれぞれに経験してきた地獄を見つめ、生きる苦しさ、哀しみを切々と歌う私たちの代表です。

詩人は、哀しみを歌う道半ばの3章にあって、最も深き哀しみの地に至りました。「ただ主を待ち望もう」（18節）。口語訳は「主に望むところのものもうせ去った」と訳します。詩人がたどり着いたのは、神に全く捨てられるという世界でした。世からだけでなく、神からも切り離されてしまった世界。それが、私たちが最も恐るべき地獄であり、自分はそこに捨て置かれたのだ、と知るに至ったのです。

しかし詩人に突如、転機が訪れます。「わたしの魂は沈み込んでいても」（20節）は、元々は「あなたの魂が沈み込む」と記されていました。ここで沈み込んでいるのは神だったということです。「沈み込む」は口語訳では「うなだれる」であり、「死へ落ち込む」（箴言2章18節）、「塵に伏す」（詩編44編26節）とも訳されます。詩人は、哀しみの果て、神から見捨てられたと思っていた地獄の底で、神を見たのです。それも、苦しみに苦しみ抜く私の上に身を沈め、うなだれ、嘆き悲しむ神を見た。だからこそ、再起不能だったはずの詩人に「再び心を励まし、なお待

ち望む」（21節）力が湧いてきたのです。

詩人が見た神の姿を、私たちも知っています。イエス・キリストです。神が人となってこの世に来て下さいました。それも、私たちの代わりに、十字架の上で悶え苦しみ、死ぬために。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」（マタイによる福音書27章46節）と、究極の哀しみを叫びきって死ぬために。

この時です。詩人の口に、全く新しい歌が生まれました。「主こそわたしの受ける分」（24節）。「分」は「嗣業」とも訳されます。かつてイスラエルが、生きる糧を得るために与えられた土地の分け前のことです。全てを失い、神を失ったはずの場所においても、なお神がおられ、神を足で踏みつけるようにして生かされている自分の姿を詩人は見たのです。

続く25節から27節はいずれも、創世記で神が連呼する「良し」と同じ言葉で始まります。創世記は哀歌と同じ時代に記されたと言われていいます。死に呑み込まれていく同胞の中で自分だけが生き残ってしまった。もはや自分という存在の意味が分からない。そんな時に聞こえてきた神の強烈な宣言、『あなたは「良い」』という存在の肯定がありました。以降、詩人は人に向かって訴え始めます。あなたも生き延びよ。苦難も甘んじて受けたらよい。哀しみの果てでも、なお我らの嗣業となって我らを生かし続けることをやめない神がおられるのだから、と。

詩人はこの後、再び嘆きの底に落ちていきます。哀歌の終わり方も暗く、絶望的です。望みを見た後も、なお哀しみは続いたということでしょう。しかし、それでもなお、その命を生きた。5章まで続くのはその証でしょう。生きる理由が分からなくても、地獄が続いても、なおこの命に神の「良し」という言葉が響いていることを知って、生き延びていったのです。

今日も教会は哀しみの果てで生まれた新しい歌を歌います。哀しみ、悶え苦しむこの世界と、そこに生きる一人ひとりに向かって、高らかに歌います。私たちには生きる理由がある。イエス・キリストという理由がある。だからあなたも生き延びよ。私たちと共に新しい歌を歌いながら、その命を生き抜くのだ、と。

（記 本庄侑子）